



凝ったインテリアの共有スペースで会話が弾む
(東京都荒川区のバウハウス南千住)

毛皮のじゅうたん敷きの広いリビングに、池のある中庭、猫脚のバスタブー。どんな人の住まいかと思えば、住人は普通の会社員ら20代中心の男女11人。住居の一部を複数の人で共有する、ゲストハウスという新しいタイプの賃貸物件だ。

11人が暮らす「バウハウス南千住」(東京・荒川)は古い木造2階建ての一軒家を改造したもの。入居者全員に4畳半×8畳の個室があり、40平方メートルのリビングルームや台所は自由に使える。2月から入居が始まり、家賃は光熱費込みで6万

不況を楽しむ暮らし術

▼中

7000〜9万2000円。周辺のワンルームマンションと比べ1万円高い程度だ。

旅行好きの会社員、立花佳奈子さん(29)は「海外のインテリアに囲まれて暮らしたかった。こんな家に住めるなんて信じられない」と満足そう。風呂やトイレも共同だが生活リズムが違いため、「案外鉢合わせしない」。別の会社員女性(28)も帰宅時に「『お帰り』と言ってくれる人がいると落ち着く」と指摘する。外国人向け共同住宅の流れをくむゲストハウスは、ここ数年で急増し

シェアであこがれ実現

首都圏を中心に600件を超えた。テレビドラマにも取り上げられ、おしゃれで個性的な物件も続々登場。個室でプライベートを確保しつつ、寂しければすぐ誰かと会える集団生活の安心感が人気で、女性の入居も多い。当初寂しかったリビングには、イベント会社に勤める坂野純一さん(29)が薄型テレビやオーディオなどを提供、誰でも使えるようにした。定期的に会議を開くなど面倒も

入居者が話し合いながら、自由に内装や施設、生活ルールをつくる物件もある。「天井は水色にカーテンレールもつけない」と話すのは、4月上旬開業の「ダイタイ」(東京・目黒)に入居した調理師の男性(28)。電化製品は冷蔵庫など最

多いが、坂野さんは「みんなで一から家を作る気分」と苦にしない。ぜいたくも手間もシェアするゲストハウス暮らし。従来の所有や賃貸の概念を超えた新しい生活スタイルとして、若い世代を中心に広がりつつある。